

# 北海道医療大学歯学部浦臼町歯科診療所でのアンケート調査(東日本歯学会第23回学術大会 一般講演抄録)

著者名(日)	塚越 慎, 塚野 寿
雑誌名	北海道医療大学歯学雑誌
巻	24
号	1
ページ	117
発行年	2005-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00009918/">http://id.nii.ac.jp/1145/00009918/</a>

が、有意に多かった。また急性発作の頻度は1年の群では他の3群に比べ有意に高かった。急性発作が起こった部位は上下顎左右大臼歯と上顎切歯が多かった。急性発作後の処置に対する回答では、抗菌薬、鎮痛薬の投与、根管開放が多かった。急性発作が起こった原因として考えられたのは、器具の突き出しと削片の押し出しとの回答が多かった。結果より経験年数に関わらず、感染根管治療の開始

後に急性発作を起こすことがあると答えたものは、ないと答えたものより多かった。急性発作の原因としては器具の突き出しや削片の押し出しによるとの回答が多かった。急性発作を予防するためには、基本的な根管器具の使用方法を徹底することが重要であると考えられた。

### 北海道医療大学歯学部浦臼町歯科診療所でのアンケート調査

○塚越 慎\*, 越野 寿\*\*

\*北海道医療大学歯学部浦臼町歯科診療所, \*\*北海道医療大学歯学部歯科補綴学第一講座

【目的】浦臼町歯科診療所は北海道医療大学歯学部の地域支援活動の一事業として運営されている。地域支援活動として診療を行うためには、その地域、住民の情報、歯科治療に関する知識やニーズについて知る必要があると思われる。そこで今回浦臼町において歯科治療を行うための参考資料とすることを目的として浦臼町歯科診療所に来所している患者に対しアンケート調査を行った。

【対象および方法】北海道医療大学歯学部浦臼町歯科診療所に来所中の患者50名に対し、本歯科診療所へ来所した動機、本歯科診療所の良いところ、悪いところ、治療に対する希望、診療所に望むこと、歯科予防処置、自費診療の項目についてアンケート調査を行った。

【結果および考察】来院理由については、家から近いからが78%と圧倒的に多く、次に従業員が親切だからとの項目が46%と多くなっている。診療所のよいと思うところについては治療の内容を説明してくれる、対応が親切であるが、それぞれ72%、68%と高い割合を示していた。このような診療所においてはただ診療を行うだけでなく、患者との信頼関係をより深く築いていかなければならない

と考えられた。

診療所の悪いと思うところについては治療期間が長い18%と一番多く、治療に対する希望では、痛くない治療、時間がかかってもしっかりした治療がそれぞれ34%、26%と多くなっている。診療所に望むことでは治療時間が長くなっても来院の回数を少なくしてほしいが30%と多くなっている。浦臼町の主要産業が農業であることを考慮すると患者が来院できる時期や時間が制約されることがあると考えられた。

予防処置については必要がないとの回答が0%であり、積極的に行っていくべきであると考えられる

保険外の治療については保険の治療で十分であるが50%を示していますが、必要なら行ってもよいが26%を占めており、来院している患者の歯科治療に対する理解の程度が高いと考えられる。

以上のことより本診療所が町立の診療所として学理に則った診療を行うとの診療方針が地域に受け入れられているものと考えられた。

### 本学歯学部附属病院における臨床実習到達度の調査 — 歯科衛生士専門学校生の小児歯科でのアンケート調査より —

○駒木 千絵\*, 小川原詩織\*, 武井 貴子\*, 五十嵐清治\*\*

\*北海道医療大学歯学部附属病院歯科衛生部, \*\*北海道医療大学歯学部小児歯科学講座

【目的】本学歯科衛生士専門学校の小児歯科臨床実習での到達目標は、大きく分けると次のとおりである。

- 1) 小児および保護者への適切な対応ができる。
- 2) 適切な齲蝕予防処置や口腔衛生指導ができる。
- 3) Four handed dentistryの実際を習得できる。

これらの目標を達成させるために実習項目は細かく分かれている。そこで、すべての課題を習得して目標に到達させるためには、学生の理解度を指導者が認識しておくことが必要であることより本調査を行った。

【方法】対象は歯科衛生士専門学校2年生、59名である。H16.5.10～H16.11.14期間の臨床実習終了後にアンケート調査を無記名で実施した。調査内容は実習開始前に配布しているプリント、実習初日のオリエンテーション、診療の準備、口腔衛生指導および診療補助についてである。

【結果および考察】アンケート結果からは、「コミュニケーションが取れなかった。」「技術不足を痛感した。」「伝えたい事を上手く伝えられなかった。」などの意見が多く見られた。学生は、頭の中である程度理解して実習に挑んでいるようだが、患者さんを前にすると緊張や経験不足から知識や能力が十分に発揮されていないことが推測された。限られた臨床実習期間ではあるが、多くの患者さんと接し、多くの経験を積むことによって職業意識をしっかりと持つ医療人になると思われるため、より多くの満足感を得ることができる臨床実習のあり方を再考する必要があると示唆された。したがって今後の小児歯科での課題として、口腔衛生指導・口腔ケアの実技を100%の学生が体験できるシステムを構築すること、事前学習としてのプリントやシミュレーション実習のあり方を見直すこと、また、患者さんの来院までの待ち時間を有効に利用するなど、検討を重ねていきたいと考えている。